

研究課題名	住文化を伝える生きた実物教材としての重文民家の活用に関する研究
研究代表者	碓田 智子（大阪教育大学 教育学部 教授）
共同研究者	長谷川ユリ（大阪教育大学 教育学部 教授） 西川 章江（大阪教育大学 教育学部 准教授） 小池志保子（大阪市立大学 生活科学研究科 准教授）
研究成果	<p><b>1) 研究の目的</b></p> <p>国指定重要文化財民家（重文民家）は60%近くが個人所有の農家や町家であり、現在も多くが住まいとして利用されている。代々住み継がれてきた重文民家は、伝統的な建築技術に加えて年中行事や生活道具類も伝えており、住文化を学べる生きた実物教材といえる。本研究は住文化を伝える実物教材としての重文民家の活用に向けて、重文・A家住宅（大阪府）をモデルに住空間を活用した住文化体験プログラムを作成・実践し、住空間の学習効果と課題の検討を行った。</p> <p><b>2) 体験学習プログラムの内容</b></p> <p>A家住宅をモデルに住文化・建築技術・建築意匠を体験的に学べるプログラムを考案し、2020年11月21日に大阪教育大学の短期留学生14名（10の国・地域）を対象に実施した。概ね中級レベルの日本語力を持つが、建築については知識を持たない学生である。なお、留学生を対象としたのは、留学生が住文化に関心を持ち理解できれば、伝統的な住まいに馴染みが少ない日本人若者にも対応可能と考えるからである。コロナウイルス感染予防として、留学生を5名・5名・4名の3つの小グループに分け、当主による住宅の概要説明のあと、①茶室での茶会、②大工技術体験、③建物解説+かまどで炊いたぜんざいの試食を約50分交代で行った。実施時間は13時30分～17時で、合計11名のスタッフと当主家族が運営にあたった。体験中の留学生とスタッフの行動を記録し、空間の利用の記録を行った。また、留学生の住空間等への関心を感想文等から把握することを試みた。</p> <p><b>3) 住空間の利用としつらいについて</b></p> <p>本プログラムでは、主屋、茶室、庭を広く活用し、茶室の毛氈の上で正座する、広縁で床に座る、土間に立つ・腰掛に座る、主屋内を移動する、草履を履いて庭を歩くという多種類の起居様式を体験し、多様なアングルで住空間を見ることができるようにした。大工技術体験は広縁で、茶会体験は庭を通ったあとは茶室内で体験した。また、主屋ザシキの床の間には掛け軸と刀掛け、ナンドでは各種の生活道具、ダイドコロでは火鉢がついた卓と座布団など茶の間の様相、茶室の床の間には掛け軸と生花を見ることができた。</p> <p><b>4) 留学生の関心について</b></p> <p>留学生の関心を把握するために、体験中に写真を撮るように依頼し、特に印象に残った空間や物の写真3枚を提出してもらった。集まった38の写真のうち、外観・ダイドコロ・ザシキ・茶室の空間やしつらいに関する写真が全体の約56%で、大工技術体験も約16%を占めた。さらに、体験1週間後に留学生に感想文を提出してもらい、感想文の名詞句をベースにテキストマイニングで整理した。頻出名詞にはA家・建築・庭・指矩・部屋・住宅が現れた。またA家のほか、指矩・茶道・座敷・茶室・茅葺・掛け軸などが特徴的なワードとして示された。建築の予備知識を持たない留学生であっても、体験学習を通じて建築に関わる専門用語を一定理解し、住空間に対して関心を持てたことが窺えた。</p> <p><b>5) まとめ</b></p> <p>A家住宅の主屋・茶室・庭を活用した住文化体験の実践によって、つぎの点が確認できた。①靴の脱ぎ履きを伴う移動には大きな混乱はないこと。②コロナ禍での実施という条件であったが、広く住空間を活用した教</p>

育活用には事前準備の上に 10 名程度のスタッフを要すること。③体験を通じて建物を見ることにより、外国人にも住空間や住文化の理解や関心につながる事が窺えた。体験内容や利用空間、参加者を変え、重文民家の教育活用について検討を深めることが今後の課題である。

(学会口頭発表)

碓田智子・小池志保子、住文化を学べる生きた実物教材としての重文民家の活用に関する実践研究—留学生を対象とした体験学習の試み—、日本建築学会大会（東海）学術講演会、2021 年 9 月発表予定（名古屋工業大学）